

日本混合研究法学会 第1回セミナーシリーズ

2017年11月20日 青山学院大学

講演会 参加報告

講演:

「混合研究法のこれまでとこれから～パラダイム論争を知らない世代へのメッセージ～」

講師: 抱井尚子

青山学院大学国際政治経済学部

国際コミュニケーション学科教授

日本混合研究法学会初代理事長



2017年11月20日、日本混合研究法学会セミナーシリーズが青山学院大学で開催された。記念すべき第1回セミナーは、本学会初代理事長を務めた抱井尚子先生による記念講演「混合研究法のこれまでとこれから」であった。本稿では参加報告として講演内容を振り返り、前理事長から次の世代に託されたメッセージを共有したい。

講演では、まず、混合研究法の定義としてCreswell (2015) および Tashakkori & Creswell (2007) を紹介し、「混合研究法が量的データと質的データの両方を収集・分析し、結果を統合することで解釈や推論を導き出す研究(アプローチ)」であることを確認した。また、混合研究法コミュニティが多様性を重んじ、この定義に収まらない混合研究法も存在することにも触れていた。

混合研究法が量的研究と質的研究をハイブリッ

ドするアプローチとして議論されるようになったのは遅くとも1990年代であると言われているが(抱井, 2015a)、コミュニティが形成されるようになったのはごく最近である。2007年に国際誌 *Journal of Mixed Methods Research* が創刊し、2014年には国際学会 Mixed Methods International Research Association が設立された。ボストンで開催された MMIRA 第1回大会には日本からの参加者も多く、抱井氏を中心に、そこに居合わせた参加者たちによって MMIRA アジア地域会議の日本開催に向けた大会実行委員会が立ち上がった。それがきっかけとなり2015年に日本混合研究法学会が設立された。抱井氏はその経緯を振り返りつつ、2015年以降に日本語で書かれた混合研究法の書籍や特集が続けて出版されたことにも触れ*、2015年を日本における混合研究法元年と位置づけていた。

抱井氏は混合研究法のこれまでとこれからを論じる上で、歴史的視座の重要性を論じていた。混合研究法が、哲学レベルでの論争(ポスト実証主義 vs. 社会構成主義)や方法論レベルでの論争(量的研究 vs. 質的研究)といった、主に1980年代の北米で起こった研究方法論をめぐるパラダイム論争の帰結として誕生した方法論であることはよく知られている。講演では、政治レベルでの論争もまた、研究方法論の質と量の潮流を中長期的な視点で見極める際に重要なポイントであることを、

(次頁へ続く)

報告者:

八田太一
京都大学iPS細胞研究所 上廣倫理研究部門 特定助教
日本混合研究法学会理事

(前頁からの続き)

米国大統領の政策と対比させて論じていた。混合研究法という新たな研究アプローチが市民権を得るに至った歴史を理解する上で、思想的潮流、政治環境の変化、科学技術の発展、制度的要因といった、マクロ環境における様々な影響が特定の研究方法論を評する言説を変容させて行くこと(抱井, 2015b)を認識する重要性がここでは強調された。

講演の終盤で抱井氏が論じたことは、混合研究法の今後の課題として、研究の評価基準のあり方であった。現在の混合研究法コミュニティにおいては、量的研究主導型から質的研究主導型に至る連続体上に、多様な認識論に基づく哲学的立ち位置を採ることが許容されている。混合研究法を第三の研究アプローチとして捉えるのであれば、研究を評価する際に量的研究と質的研究の評価基準をそのまま当てはめることは不適切であり、その評価基準は質と量のハイブリッドとして革新的なものである出発点としての自身(もしくは論文著者)の哲学べきだと主張するものであった。ここで留意すべきは、混合型研究を実施する際に研究者が採る哲学的立ち位置と矛盾しない、研究の評価基準のあり方の検討である。混合研究法の研究実践においては、哲学的立ち位置と研究の評価基準との関係は「トンネルの入口と出口」のようなものであると形容していた。だからこそ、混合型研究を実施する者(もしくは評価する者)には、その的前提をしっかりと認識することが重要であると抱井氏は結んだ。



抱井氏が日本における混合研究法元年と呼んだ2015年以降、デザインや統合を解説する日本語の書籍や論考はそれ以前よりも多く発行されるように

なり、講演やワークショップなどを通じて混合研究法を理解する機会も増えた。徐々にではあるが、混合研究法に関する共通言語が整理され、それを議論する場も増えてきた。現在も、混合研究法のデザインの組み方や統合の仕方に関するニーズは高いものと思われる。しかしながら、本講演は、混合研究法の共通言語やハウツーの話にはほとんど触れることなく、混合研究法の歴史的変遷と今後の方向性に焦点を当てたものであった。

混合研究法は、哲学レベルでの論争、方法論レベルでの論争、そして政治レベルでの論争の煽りを受けながら醸成された研究方法論であることを論じる中で、抱井氏が示そうとしたことの一つは、マクロ環境は、生身の人間が営む研究活動のあり方を方向づけ、研究者個人や研究集団の認識論を変性させる力を持つことであったように思われる。そして、混合研究法の評価基準のあり方を語る抱井氏の言葉から、実際の研究(論文)で量と質のシナジーを具現化させることの苦さを感じずにはいられなかった。北米のようなパラダイム論争を体験していない私たちが、混合研究法を強かに使いこなせるようになるには、この力の存在に自覚的である必要はありそうだ。

参考文献

Creswell, J. W. (2015). *A concise introduction to mixed methods research*. Sage. [抱井尚子 訳 (2017). 『早わかり混合研究法』. ナカニシヤ出版]

抱井尚子(2015a). 混合研究法入門—質と量による統合のアート. 医学書院.

抱井尚子(2015b). 理論からストーリーへ—構成主義的グラウンデッド・セオリー法とは. 青山国際政経論集, 94, 43-71.

Tashakkori, A., & Creswell, J. W. (2007). Editorial: The New Era of Mixed Methods. *Journal of Mixed Methods Research*, 1(1), 3-7.

*: 2015年以前に発行された訳書として、操華子・森岡崇(訳)『研究デザイン』、大谷順子(訳)『人間科学のための混合研究法』がある。2018年3月、混合型研究の支援ツール「m-STAR 21」(In 亀井智子(編)『混合研究法を用いた看護研究の考え方と進め方ハンドブック』)が開発された。これは日本語で作成された初めての混合研究法ガイドラインである(下記URLで閲覧可能)。
(<http://iss-research.jp/m-star21/mmr/>)

報告者 :

八田太一
京都大学iPS細胞研究所 上廣倫理研究部門 特定助教
日本混合研究法学会理事

混合研究法レクチャー&ワークショップ：MMR-Kyoto

2018年2月3日 キャンパスプラザ京都第一会議室

講演会 参加報告

混合研究法レクチャー&ワークショップ

講師： 八田太一 京都大学CiRA／日本混合研究法学会理事

成田慶一 京大病院iACT／日本混合研究法学会理事



2018年の2月3日に、キャンパスプラザ京都で行われた「混合研究法レクチャー&ワークショップ」に参加してきました。今回は、そこで学んだこと、考えたことについて、私自身の経験を交えながらお伝えしたいと思います。

勉強会は、「レクチャー」と「ワークショップ」の二部構成で実施されました。前半2時間は「混合研究法」の基礎知識に関するレクチャー、後半2時間は2名の話者提供者の研究計画を題材に、小グループでのディスカッションを基にした「ワークショップ」が行われました。この「ワークショップ」は、計画書の内容を充実させるプロセスから体験的に学ぶことを目指すものであったため、新たな発想を多く得ることができました。

私は現在、中国・北京で日本語教師として働く傍

ら、「第二外国語」として中国の大学で日本語科目を履修する大学生のモチベーションに関する博士論文研究を進めています。当初は、少人数の学習者に絞った質的アプローチを基礎に研究を開始したものの、設定した研究設問に答えを出そうとする中で、大規模な質問紙調査を含めた量的アプローチも同時に研究デザインに組み込む必要性を認識するに至りました。そのため、質的アプローチと量的アプローチの両者の利点を兼ね備えた「混合研究法」の研究デザインについて、より深く学びたいと思うようになりました。

今回、私が参加を決めた大きな理由のひとつがこの勉強会のプログラムの中に「ワークショップ」の時間が設けられていたことでした。私自身、研究デザインについて考える際には、「一方向的なやり取り」だけにとどまらず、複数のメンバーでじっくり話したり、そのような機会を設けたりすることを好みます。今回の参加者の方々の専門分野は、社会科学を中心に、心理、医療、看護、福祉、経営など多岐にわたっていました。言語教育をルーツとする参加者は私一人だったため、研究デザインに関する意見を述べる際にも、日本語教育の現状、歴史、近年の研究の動向といったことについて、他の分野・現場にいる方々にわかりやすく伝える必要性を認識しました。普段、参画しているフィールドでは、

(次頁に続く)

報告者：

菅田陽平

北京大学大学院外国語学研究科博士後期課程3年

(前頁からの続き)

なかなか出会うことができない分野の方々から、現場で得られる実践知やその現場が持つ社会的文脈について伺うことができ、異なった専門分野を持つ方々をつなぐことの重要性を改めて感じた次第です。各グループでのディスカッションがとても白熱していたこともあり、私自身は、今後、希望者によるLineのグループトークのようなものを設定して頂けたら、ぜひ、加入したいと感じました。そう願うのは、もし、そのようなことが可能になれば、勉強会終了後も、異なった分野同士の参加者がさらにつながっていくきっかけになるのではないかと考えるからです。



最後になりましたが、基礎的な内容にも関わらず、こちらの質問に丁寧にお答え頂いた八田先生、成田先生、そして、当日、お世話になった方々に心よりお礼を申し上げます。初めて、「混合研究法」に関する集まりに参加したにも関わらず、温かく迎えてくださり、たくさんの発言の機会を頂いたことは、私自身が研究を進めていく上で、貴重な時間となりました。実際に、日本語教育分野の研究者の中にも、質的・量的アプローチを組み合わせた形での研究に奮闘されている方がいます。そのような方々にもきっと今回の「混合研究法レクチャー＆ワークショップ」は、魅力的に映るのではないかと考えています。



報告者：

菅田陽平

北京大学大学院外国語学研究科博士後期課程3年

日本混合研究法学会 第2回セミナーシリーズ

共同開催： 静岡文化芸術大学河村研究室

浜松医科大学健康社会医学講座

熊本大学

2018年2月8日 JR浜松駅 えんてつ駅前貸会議室

講演会 参加報告

講演：

「ポジティブ・ディビアンズ 究極的な(!)実用主義の混合法による課題解決手法」

講師：Arvind Singhal, PhD

テキサス大学エルパソ校コミュニケーション学教授



「ポジティブ・ディビアンズ(PD)は、過去100年間で最も画期的な新しいパラダイムである」という衝撃的な言葉で、Singhal教授の講演は始まった。肥満、栄養、糖尿病、院内感染など、健康・医療に関して複雑な問題は世界共通にある。しかし、医療従事者が受けている教育や経験は、これらの「問題」に対する「解決策」を見えなくしていると

いう。「解決策」がすぐそこにあるにも関わらず、職業的な訓練を積むことにより「問題」の方に着眼する習慣やメンタリティが身につき、解決が遠のいている。そこで、Singhal教授は「初心者がもつまっさらな心」を思い出して欲しい、今まで学んだことをすべて忘れて欲しい、と聴衆にチャレンジし、3つのストーリーを語られた。1つめはイスラム圏のおとぎ話で主人公ナセルディン、2つめはマザーテレサ、3つめはガンジーの話である。これらを通して伝えられたのは、解決策はすぐそこにあるが見えなくなっていること、問題(ギャップや欠陥、うまくいっていないこと)でなく、解決策・うまくいっていることに目を向ける、通常の視点とは反対側から見る、というメッセージである。

これらをふまえた上で、ポジティブ・ディビアンズへの着目が奏効した公衆衛生活動の例として、1990年代に行われたベトナムの農村における低栄養対策が語られた。4つの村で、5才以下の

(次頁へ続く)

報告者：

井上真智子
浜松医科大学地域家庭医療学講座教授
日本混合研究法学会理事

(前頁からの続き)

子ども3000人に量的調査を行ったところ、2000人が低栄養、1000人が栄養状態良好であった。ここで、低栄養の子どもでなく、栄養状態が良好な子どもの家庭が注目された。中でも、裕福で十分な栄養を摂ることができる家庭ではなく、貧困でありながら子どもの栄養状態が良いという「外れ値(Outlier)」に該当する24の家庭(全体の2.4%)が質的調査の対象となる。母親達がどのような工夫を行って子どもに栄養摂取をさせているかを住民達が実地調査したところ、他の家庭では廃棄されていたようなさつまいものつるを食べさせていた、水田の小エビ・カニといった自然のタンパク質を食べさせていた、母親が子どもに食事を最後まで徹底して食べさせるようにしていた、などの慣習が行われていたことがわかった。これらは、長年にわたって代々行われていたにもかかわらず知られていなかった低栄養の解決策であり、PDに着目して調査したことで発見された秘訣ともいえる。この研究により、その後の6-8年で、ベトナム農村部の子ども達の栄養状態は大きく改善されることになった。

このほかにもPDが有効であった事例として、米国の病院の院内感染対策が紹介された。多剤耐性菌による院内感染の発生率が極端に低い病院で、どのような行為を看護師や医師などスタッフが行っているかを調査したところ、意外な小さな習慣が院内感染予防に役立っていたことが明らかになったという。



通常の疫学研究では、問題の原因に着目し、結果の発生リスクを帰納的に予測する(問題の発生に関する仮説をたてる)というアプローチがとられる。しかし、PDは、仮説に反してありえない良好な結果を呈している事例に着目し、そこから「解決策」を探るというアプローチである。始めにストーリーを用いて示された「解決策はすぐそこにあるが見えていない」「反対側からみるのが大切」というメッセージが一貫してPDを理解するために役立っていた。

Singhal教授の語りは、ゆっくりと力強い言葉で聴衆をひきつけるものであり、時間を忘れて集中することができた。ストーリーを用いて語ることで、聴衆の記憶に深く残るメッセージとなるということも強く聴衆に伝わったと感じる。息のぴったりあった逐次通訳をされた河村洋子先生(静岡文化芸術大学)、企画に関わられた皆様に感謝したい。

報告者:

井上真智子
浜松医科大学地域家庭医療学講座教授
日本混合研究法学会理事

～混合研究法と私～



質的データと量的データの結合

ージョイント・ディスプレイの魅力

聖路加国際大学大学院看護学研究科
PCC実践開発研究部
亀井智子

私が混合研究法に触れるようになってから、10年が経過しました。混合研究法という方法があることを知ったのはCreswell先生の著書の訳本である「研究デザイン: 質的・量的・そしてミックス法」(日本看護協会出版会, 2007)でした。

ちょうどこの時、「世代間交流を取り入れた看護支援を日本で開発してみないか?」と、海外のある財団に声をかけて頂いた。本学は、市民主導型のケア(People-Centered Care)を開発する拠点として、文部科学省21世紀COEプログラムに2003年度に採択されて全学的な研究活動を行っていた時期であったため、市民とのパートナーシップによるケアの創設には理解があり、大学の教室を借りて、地域の高齢者と小学生を対象とした週1回の世代間交流プログラムをスタートすることになりました。全く初めてのテーマで、新たな研究を混合研究法を用いて開始したという今から思うと大胆なチャレンジであったと思います。

高齢者と小学生という”異世代”が、都会の中でどのように交流していくのか? それは測れるものなのか? 尺度があるのか探してみましたが、2007年当時には世代間交流の量を測定する尺度自体、存在していませんでした。測定できないのであれば、交流の様子を見て、そのまま記述するしかないと考え、参加観察を始め、観察記録を貯めていきました。発会から2年間の世代間交流の様子を観察した記録を分析し、世代間交流の様相について、

コード、サブカテゴリー、カテゴリーを順に抽出していき、これを尺度化して、最終的に世代間交流観察尺度をまとめることができ、現在では、この観察尺度を用いた観察を継続しています。

そしてこの「世代間交流の量」は、参加する人の特性によって異なるのか、プログラムの内容によって異なるのかを現在も探求しています。

例えば、世代間交流プログラムでは、地域の書道の先生を招き、世代間交流書道を楽しんでいます。また、ある時にはみんなでおやつ作りを行います。書道の時とおやつ作りの時では、明らかに高齢者と小学生の表情や会話など、交流の質は異なっています。また、健康な高齢者、虚弱な高齢者、認知症をお持ちの高齢者では、小学生への言葉かけやまなざしなどが異なっています。これらの事象を混合研究法を用いて、なぜそのような交流が生じるのかを深く探求し、理解しようとしているわけです。

特に私が強く関心を持っていることは、2種データの「結合・ジョイント」です。これはCreswell先生やTeddlie先生はじめ、いくつもの成書に書かれている、混合研究法の肝ですが、実際に性質が異なるデータを結合しようとすると、本当に難しいと感じます。

(次頁へ続く)

文責:

亀井智子

聖路加国際大学大学院看護学研究科 PCC実践開発研究部教授
日本混合研究法学会副理事長

～混合研究法と私～

(前頁からの続き)

「ジョイント」とは、異なるものの継ぎ目、あるいは部分が結合されること(人の骨と骨をつなぐ”関節”のことも指します)ですが、混合研究法におけるジョイントとは、質的データと量的データの分析結果を統合、あるいは結合することをさしています。

「ジョイント・ディスプレイ」とは質的・量的データを組み合わせ、統合・結合結果を視覚的に提示する手法¹⁾ですが、これを作るプロセスが一番の醍醐味であると感じています。混合研究法の計画段階においては、異なる性質のデータ同士を結合するというイメージをなかなか持ちにくく、「後からどうにかなる」と思って研究をスタートすることはないでしょうか? それでもうまくいくこともあると思いますが、やはり何を知りたいのか、頭の中でイメージしておくことは必要であると思います。

Creswell先生²⁾は、このジョイント・ディスプレイを主に4つのタイプ、すなわち「対照比較型」ジョイント・ディスプレイ、「テーマ別統計量型」ジョイント・ディスプレイ、「結果追跡型」ジョイント・ディスプレイ、「量的測定尺度開発型」ジョイント・ディスプレイ(和訳はいずれも抱井³⁾による)として紹介しています。縦・横に数値やテーマを並べて比較する場合や、両者の違いを比較する場合、片方の結果をもう片方のデータで説明する場合などがCreswell先生により紹介されています。

私は他にも”ジョイント”する方法があるのではないかと疑いの目で、ジョイント・ディスプレイの文献検討を行いました。

確かにそれはありました。それらをどのように表現したらよいかと考えた末、「コンセプトマップ型」ジョイント・ディスプレイと「データ変換型」ジョイント・ディスプレイと名前を付けました。

コンセプトマップ型とは、質的研究や量的研究結果を図やダイアグラムに示し、相互の関係性を示すことを指すものです。空間配置に意味を持たせ、結果を統合しているもの、関係性の強さを表現しているもの、また概念構造を表現しているものなどが見受けられました。もう1種類、データ変換型と命名したジョイントでスプレッドシートは、質的データを肯定的回答/否定的回答や、はい/いいえに一度変換して、それに点数をつけて質データを量化し、その数値の合計点などを表中に示すという方法です。手の込んだ表し方であると感心しました。

2種データをジョイントする表し方として、まだまだ新種のジョイント・ディスプレイの方法があるに違いないと思っていますし、新しいジョイントのさせ方をこれからも考えていきたいと思っています。会員の皆様も混合研究法論文を読むときの一つの視点として、「ジョイント・ディスプレイ探し」をしていただくと、ご自身が作成するジョイント・ディスプレイのヒントとして、きっと生かされると思います。

1) 抱井尚子、亀井智子. (2016). インタビュー: 混合研究法で看護研究が深くなるーミクロとマクロの視点から現象を立体的に理解する方法論, 週刊医学界新聞, 3163号.
http://www.igaku-shoin.co.jp/paperDetail.do?id=PA03163_02

2) Creswell, J.W. (2015). A concise introduction to mixed methods research, SAGE publications, Inc, LA.

3) ジョンW. クレスウェル著、抱井尚子訳. (2017). 早わかり混合研究法、ナカニシヤ出版、京都.

文責:

亀井智子

聖路加国際大学大学院看護学研究科 PCC実践開発研究部教授
日本混合研究法学会副理事長



第4回日本混合研究法学会年次大会

日時: 2018年9月29日(土)～30日(日)

場所: 順天堂大学医療看護学部

大会テーマ:「混合研究法と実践」

【プログラム概要】(予定であり変更の可能性有)

9月29日(土)

- ・ プレカンファレンス・ワークショップ
John W. Creswell (ミシガン大学) & Michael D. Fetters (ミシガン大学)
“Three Uses of Joint Displays in Mixed Methods Research and an Interactive Activity for Data Analysis”
- ・ SAGE企画「Research Methods Database」
- ・ 大会長講演
尾島俊之(浜松医科大学)「PDCAサイクルを回すための混合研究法の活用」
- ・ 一般演題口頭発表 / 一般演題ラウンドテーブル
- ・ 懇親会

9月30日(日)

- ・ 学会企画ラウンドテーブル「結局、混合研究法の何が難しいのか？」
- ・ 一般演題ラウンドテーブル
- ・ 特別講演1
Michael D. Fetters (ミシガン大学) “Core Analysis Procedures for Mixed Methods Research”
- ・ 特別講演2
John W. Creswell (ミシガン大学) “The Most Challenging Parts of Designing and Conducting Mixed Methods Research”
- ・ 学会総会
- ・ 基調講演
中村高康(東京大学)「混合研究法と実践」
- ・ MMRオープンフォーラム 「混合研究法と実践、その展開と課題」



【大会参加費】

(一般): 正会員 6,000 円 非会員 10,000円

(学生): 正会員 3,000 円 非会員 5,000円

ワークショップ 5,000円 (正会員、非会員、学生も同額)

懇親会 7,000円 (正会員、非会員、学生も同額)

※大会参加費振込期限は9月14日(金)午後3時。以降は当日大会受付にてお支払いください。



第4回日本混合研究法学会に向けて

大会長 尾島 俊之

実行委員長 野崎 真奈美



大会長よりあいさつ

日本混合研究法学会は2015年に発足し、国際混合研究法学会(Mixed Methods International Research Association; MMIRA)関連団体としての承認も受け活動を行ってきており、この度、第4回年次大会を開催することとなりました。

現代社会はものごとが複雑化し、次々と新しい課題が発生する中でその対応が求められています。対応のための科学的な知見として、数量的な研究が重視されることが多いですが、想定していなかった項目については無力です。一方で、質的な研究は多様で詳細な情報の収集が可能ですが、効果の大小を比較して対応の選択をするなどは苦手です。そこで、この両者の方法を統合した混合研究法がとても重要になっています。

年次大会も回数を重ね、混合研究法について学ぶだけではなく、実践する段階に入ってきていると考えられます。そこで今年のメインテーマを、「混合研究法と実践」といたしました。実践には、研究の実践と、現場における課題解決の実践が含まれます。看護、健康科学、教育を始めとして、会員のそれぞれの分野における課題に取り組む上で、混合研究法が必要となることが多いと考えられます。プレナリーセッションでは、そのような実践について報告及び意見交換を行いたいと思います。

今回の年次大会によって、さまざまな経験や立場の方々が意見交換し合うことによって、より良い混合研究法の実践が生まれ、その発展の礎となれればと考えています。

実行委員長より開催概要について

本会議は、近年世界的に実践研究分野において積極的に用いられ始めた研究手法「混合研究法」に関する学会である日本混合研究法学会の第4回年次大会です。2017年8月に立命館大学いばらきキャンパスにおいて第3回年次大会を、国際学会である国際混合研究法学会(Mixed Methods International Research Association: MMIRA)の「アジア地域会議」と共同開催していますが、今回は特に国内の研究者に向けて、日本語を主要言語として大会を開催します。

混合研究法は主に医学・看護学系研究者の間で広く用いられていますが、これらの領域にとどまらず、心理学、教育学、社会学など分野を問わず混合研究法に関心のある参加者を募り、学際的な視点から混合研究法に関する活発な議論を展開する場を提供するものです。

大会1日目にはミシガン大学混合研究法研究教育プログラム(Michigan Mixed Methods Research and Scholarship Program)のジョン・クレスウェル氏(Mixed Methods International Research Association (MMIRA)創始者)およびマイク・フェターズ氏(*Journal of Mixed Methods Research*の現共同編集委員長)を招聘してワークショップを行うと共に、大会長講演、一般演題等を行う予定です。

2日目には海外招聘のお二人による特別講演、中村高康氏(東京大学)による基調講演、パネルディスカッションを予定しています。また、今回は新しい試みとして、比較的少人数で深い意見交換を行うラウンドテーブル形式の一般演題発表を取り入れています。

文責： 尾島俊之
浜松医科大学健康社会医学講座教授
日本混合研究法学会理事長

野崎真奈美
順天堂大学医療看護学部教授
日本混合研究法学会理事

書籍紹介

Charles Teddlie & Abbas Tashakkori 著

新刊

混合研究法の基礎

—社会・行動科学の量的・質的アプローチの統合—

土屋 敦、八田 太一、藤田 みさお 監訳



混合研究法は、社会科学や行動科学で用いられる量的アプローチと質的アプローチの統合を実現させる研究方法論である。本書の特徴の一つは、調査研究の研究手法や方法論として量的研究と質的研究を対極に位置づけ、その中間的特性をもつものとして混合研究法を布置することで、社会科学や行動科学で用いられる研究手法や方法論について連続的な繋がりを示している点である。このような研究手法や方法論の見取り図を手に入れておくことは、どのアプローチを選ぶにしても調査研究に取り組む上でアドバンテージとなるだろう。

本書は世界中で読まれ、研究方法論の教科書や雑誌で引用され続けており、混合研究法の代表的な教科書の一つである。学生はもとより、既に混合研究法を用いた経験のある研究者、医療や教育の現場で生じる問題に

向き合う実践家、研究指導に従事する教員など、混合研究法に関心を寄せるあらゆる立場の方々にとって、本書はそれぞれのレベルに合わせた「基礎」に立ち返る必携の一冊となるだろう。

292頁 本体4,300円＋税

西村書店より2017年10月発売

原書 Foundations of Mixed Methods Research: Integrating Quantitative and Qualitative Approaches in the Social and Behavioral Sciences

文責:

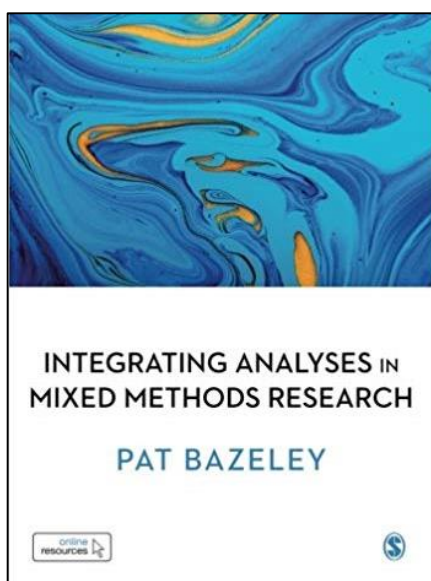
八田太一
京都大学iPS細胞研究所 上廣倫理研究部門 特定助教
日本混合研究法学会理事

書籍紹介

Pat Bazeley著

Integrating Analyses in Mixed Methods Research

新刊



本書は、タイトルの通り、混合研究法におけるデータの統合に焦点をあてたものである。混合研究法の特徴は、量的研究法にも質的研究法にもない、データの統合（integration）にあるが、この最大の特徴が、混合研究法を実施する上で最も難しい点でもある。本書は、このデータの統合を実践するための、具体的な戦略や手続きを提示する内容となっている。

3部構成になっている本書のパート1では、まず混合研究法の概説がなされる。混合研究法が出現した背景は何か、リアリティ（現実）の理解に対する哲学的な立場の存在、パラダイムと混合研究など、混合研究法初学者にとっては入門的な内容であり、混合研究法実践者にとっては混合研究を実施する際のスタンス確認のポイントとなる。パート2では、データの統合の具体的な戦略と手続きが次々と紹介される。例えば、順次的（sequential）なデータの統合や、補完的（complementary）なデータの統合、関連付け

る（linked）データの統合や、データ変換（data transformation）によるデータの統合等について、例を参照しながら理解を深めていく。パート3では、分析結果を根拠ある主張（warranted assertion）へと導く方法について言及している。

混合型研究の報告で批判の対象となるのは、データの統合がなされていないか、不十分である場合である。本書は、長年に渡り研究者として、またフリーランスのリサーチ・コンサルタントとして活躍を続けるベイズリー氏の、統合の方法に関する指南が詰まった実践書である。

328頁 アマゾン参考価格 4,568円

SAGEより2017年11月発売

文責:

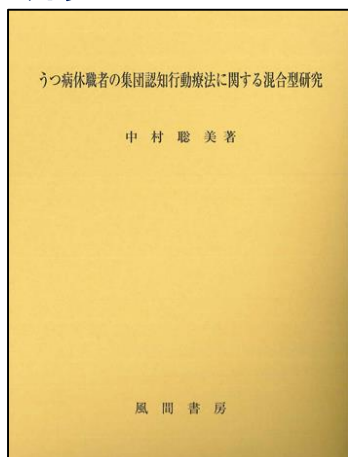
田島千裕
学習院女子大学国際文化交流学部准教授
日本混合研究法学会理事

書籍紹介

中村聡美 著

うつ病休職者の集団認知行動療法に関する 混合型研究

新刊



臨床心理学分野の学位論文における混合研究法の活用例は少ない中、本書は、ヘルスサイエンスとモデル上の相性も良い認知行動療法に関する労作である。特に臨床心理学的関心から言えば、うつ病による休職中の方に対する集団認知行動療法プログラムの介入評価と認知行動面の変容過程について明らかにしようとしたという点で、近年の産業精神保健の関心にも沿うものであり、臨床現場に有用な知見をもたらしていると言えるだろう。

評者も臨床心理学分野で臨床と研究に従事してきたという共通点があり、また混合研究法コミュニティでは編集・査読・ワークショップ実施などに従事してきた経験から、読んでいて気になった点を指摘しながら、本書の有用性と価値について論じてみたい。

まず、第1章で混合研究法と質的研究についての立場や強調点について整理してあり、以降に連なる研究を読み進めるうえで必要な知識と前提を提供している点は評価したい。しかしながら、研究全体をどのように混合研究法の観点から構造化して提示するべきかという点については、検討の余地があると思われた。

ここでは、研究デザインに関するフローチャート (p. 65) についてのみ指摘しておく

たい。混合研究法によるデザインは、基本デザインの組み合わせで無限のバリエーションが構築可能ではあるが、研究構成要素を細分化し過ぎてしまったことで強調されるべき量と質の統合が不明確になっている点で、改善の余地があると思われた。特に量的研究として行われた質問紙研究1~3は、うつ病による休職の初回群と複数回群の違いを調べるという目的で、同一時期、同一対象から収集したデータセットに基づく研究であるので、現代的心理学的研究であれば、一つの変量解析の研究としてみなされることが多いと思われる。また、本書の最も重要な知見は認知行動療法を用いた介入研究(研究5~7)で得られていると言って差し支えないだろうから、この部分を混合型介入デザインとして図示するのがよいと思われる。もし休職回数という問題意識を引き継ぎ、量的研究(研究1~3)と介入研究(研究5~7)を連結させる場合には、介入研究の部分を埋め込みデザイン QUAL (quan) に変更し、QUAN→QUAL (quan) という順次デザインとする可能性もあるだろう。またフローチャートには、手続き(方法)と成果物(結果)に関する情報を記載するのがよいとされている点も指摘しておきたい。

このフローチャートというのは、研究者の方法論的見地を集約したものであるもので、十全に作成するのは容易ではない。評者の知る限り、認知行動モデルでの混合型研究論文は、国内では中村がいち早く取り組んだものであり、その経験を公刊という形で共有可能にした功績はとても大きいと思われる。臨床心理学領域での、特に介入評価研究における応用例が本書を契機に増えていき、少しずつ我々の理解とプレゼンテーションのクオリティが深まっていくことを期待したい。

300頁 本体8,000円+税
風間書房より2018年2月発売

文責:

成田慶一
京都大学大学院医学研究科
日本混合研究法学会理事

年次大会早期申し込み

日本混合研究法学会第4回年次大会参加費振り込み期限は、9月14日(金)午後3時です。お申し込み及びお振込みはお早目に。プログラムを含め詳細は下記をご覧ください。

<http://www.jsmmr.org/conference/jsmmr2018/>

年次大会運営委員募集

9月の大会実行委員を募集しています。当日のお手伝いが可能という方、あるいは準備期間から携わってくださる方も募集します。お申し出は下記までお願い致します。締め切りは、7月20日です。

日本混合研究法学会 事務局
jsmmr.adm@gmail.com

編集後記

ニュースレター第6号には、2017年秋より各地で開催が始まった「セミナーシリーズ」の参加報告や、エッセイ調で混合研究について語って頂く「混合研究法と私」といった新たな記事を掲載しました。また、これまでのニュースレターと同様に、書籍紹介も掲載しております。ご寄稿下さった皆さまには、この場を借りて改めまして心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

さて、次号のニュースレター第7号は、6か月後に発行予定です。ご寄稿頂ける会員の方は、是非事務局メールアドレスまでご連絡くださいますようお願い申し上げます。記事は随時受け付けております。ご協力のほど、何卒宜しくお願い致します。

ニュースレター記事宛先(事務局):
jsmmr.adm@gmail.com

日本混合研究法学会

ニュースレター第6号

【発行日】2018年7月5日

【発行者】日本混合研究法学会

【理事長】尾島俊之・浜松医科大学

【副理事長】亀井智子・聖路加国際大学

【理事】

稲葉光行・立命館大学
井上真智子・浜松医科大学
抱井尚子・青山学院大学
河村洋子・静岡文化大学
田島千裕・学習院女子大学
成田慶一・京都大学
野崎真奈美・順天堂大学
八田太一・京都大学
福田美和子・東京慈恵会医科大学

【事務局】

福田美和子・東京慈恵会医科大学

【ニュースレター編集委員長】

田島千裕・学習院女子大学

【ニュースレター編集委員】

大河原知嘉子・東京医科歯科大学
マイルズ・グローガン・関西大学